

IT-1 現場でのプロジェクトマネジメント

13:10 実際の現場で、PMはどうやるか

富士通株式会社 第二バンキングソリューション事業本部
プロジェクト課長 佐藤 義久

【セッション概要】

プロジェクトマネジャーは、プロジェクトを成功に導くことが役目である。プロジェクトは生きているため、ドロドロしていて、マネジメントの知識や理論・理屈だけではプロジェクトは成功しない。成功させるためには、目的を見失うことなく、場面ごとに何が必要かを考え、最善となる事を実施する必要がある。今までのプロジェクト現場での経験・体験を通し、「PMに必要なスキル」と「現場で実践してきたマネジメント要素の実施ポイント」について、例を含めて述べる。

【講演者略歴】1982年某アパレルメーカー入社。システム開発に従事。1987年富士通のSE部門に入社。銀行等の金融機関のプロジェクト業務に従事。現場でのPMを実施しながら、社内PM研修講師を実施。現在、2000人月超の移行システムプロジェクトのPMを実施中。

IT-2 ソフトウェアプロダクトライン

14:15 その考え方を支える仕組み

株式会社SRA
産業開発第1事業部 第2部 林 好一

【セッション概要】

今、ソフトウェアプロダクトラインエンジニアリング(SPLE)がますます注目を集めている。理由は、品質を犠牲にせず生産性を劇的に向上しうるからであるが、実は真骨頂はビジネスでの機動性が確保できるようになることである。本講演では、まずSPLEによってビジネス上の効率が達成できることを示し、次いでそのために重要になるプロセスを概観する。また、再利用を根幹に据えるSPLEの、単一システム開発にはない種類の活動に触れ、再利用そのもののあり方を見直す。

【講演者略歴】ソフトウェアプロセスおよびSPLEを対象分野として調査研究、モデリング、教育や課題識別・解消等の支援活動を行う。2009年、「ソフトウェアプロダクトラインエンジニアリング」を共訳。組込みソフトウェアギルド代表幹事、SPL国際会議チュートリアル共同チェア。

IT-3 arrowheadシステムにおける品質確保の実践

15:35 当たり前の作業が正しく行われていることをフォローする仕組みづくり

富士通株式会社 保険証券ソリューション事業本部
東証事業部 澁谷 岳正

【セッション概要】

「世界最高クラスの性能」を実現したシステムの開発における現場の作業は特別なものではなく、一つひとつの作業を実直に、真摯に行って、地道に積み上げた結果である。PMは全員が同じ意識、同じ認識、同じ目標を持って作業するよう導いた。システム開発は当たり前の作業を軽視せずしっかりと行うことで成果をあげることができる。arrowheadシステムの開発において品質確保につながった「全員が当たり前の作業を自然にできるようになる」ためのマネジメント手法を紹介する。

【講演者略歴】慶應義塾大学環境情報学部卒。重工メーカーのシステム部を経て2002年富士通株式会社に入社。以来、金融取引所や証券業務等のシステム開発に従事。2007年より東京証券取引所arrowheadシステムの業務アプリ開発を担当。2005年PMP®取得。2010年富士通PM認定取得。

IT-4 組織を動かす根回しスキル

16:40 ステークホルダー分析と説得工作

株式会社PMコンセプト
代表取締役社長 長尾 清一

【セッション概要】

プロジェクトの推進には様々なステークホルダーの利害が絡んでくる。どんなに優れた企画提案でも承認されなければ実行できない。それぞれの立場や目的、優先順位の違いが速やかな支持獲得を阻む状況で、単に正論を押し通しても行き詰まるだけだ。ステークホルダー分析を基にした戦略的な「根回し」が不可欠。これまで現場ではPM手法を洗練化させてきた反面、人を説得する術が軽視されてきた。今回は「いかに行動力学的に人を説得し、合意形成を実現させるか」を解説する。

【講演者略歴】UCバークレー校ビジネススクール卒MBA取得。大規模プロジェクトを15年間指揮監督。1993年よりPM専門の米国企業アジア総責任者として7ヶ国でPM研修を実施。1993年PMP®取得。1997年PMコンセプト設立。近著に「問題プロジェクトの火消し術」「バンダー・マネジメントの極意」

PA-1 省電力を実現するソフト開発手法の紹介

13:10 中国地区の産学官連携におけるP2Mの適用事例

アイシーエナジー・スタンダード 代表
広島P2M倶楽部世話人 船岡 和宏

【セッション概要】

電力が無尽蔵ではないと分かった現在において『省電力』の重要性は、それまでのエコに対する取り組みとは比較にならないほど加速しているが、中国地区では「ソフトウェアで省電力を実現する!」というテーマについて、産学官で2008年から取り組み、今年事業化に至った。本セッションでは、このプロジェクトの経緯とその中で得られたマネジメント成功のための原則、またソフトウェアで省電力を実現するためのノウハウや、分散処理に特化した言語「Erlang」を紹介する。

【講演者略歴】平成7年 大阪教育大学数理学専攻卒業。平成7年～ 株式会社ジーテック(広島市)にてソフト開発に従事。平成21年 経産省戦略的基盤技術高度化支援事業にてPM。平成23年 アイシーエナジー・スタンダードとして事業化。平成19年～広島P2M倶楽部代表。

PA-2 IT分野でのP2M活用研究

14:15 P2Mを活用すれば日本のITを強く出来る

株式会社ゆうちょ銀行
第一システム開発部 部長 近藤 洋司

【セッション概要】

IT分野ではプロジェクトマネジメントが普及、定着した。一方、プロジェクトの高度・複雑・経営直結化が進み、従来PM手法だけでは限界も出ている。PMシンポ2010では、これらIT業界の課題と解決のためにはP2Mの活用が有効であると発表した。そして、今回、PMシンポ2011ではユーザ、バンダーが一体化して、高度・複雑・経営直結化したプロジェクトを成功させるための、P2Mの具体的活用方法を発表する。なお、現在、これらをP2M活用ハンドブックとして編纂中である。

【講演者略歴】早稲田大学理工学部卒業後、富士通株式会社入社。主として、金融機関向けシステム開発に従事。システムエンジニア、プロジェクトマネジャー、システムコンサルタントなどを経て、2009年より現職。

PA-3 クラウド導入成功のビジネスモデル

15:35

年金積立金管理運用独立行政法人
情報化統括責任者(CIO)補佐官 平井 一志

【セッション概要】

東日本震災により電子化の脆弱性が露になり、エネルギー効率の観点からクラウドコンピューティングの有効性がクローズアップされることになった。しかしクラウドには、データを物理的に廃棄できないなどの制約がある。したがってクラウド導入成功には、ただ単に仮想化技術のみならず、仮想化技術とコンテンツとの同期を取るビジネスモデルの構築が必要不可欠である。P2Mのスキームモデル、システムモデル、サービスモデルを活用し、ビジネスモデル構築のポイントを説く。

【講演者略歴】1975年三井信託銀行株式会社(現三井住友トラストグループ)入社。資金部、資金証券部、総合企画部、年金運用部、公的年金運用部長。2002年同信託システム子会社、中央三井インフォメーションテクノロジー株式会社取締役就任、品質保証部長ほか歴任。2008年現職。

PA-4 スマート・シティの一体化構想への取り組み

16:40 構想推進のプログラムマネジメント

日揮株式会社 顧問
事業推進プロジェクト本部 丸山 修平

【セッション概要】

PMAJは公的委託で「環境ビジネスの大規模開発プロジェクトにおけるP2M活用モデル」の研究を行った。大規模環境対応プロジェクトを一体化して実現し、結果我が国輸出戦略の基幹化とすることを狙い。特にスマートシティをまとめた実体として実現する案件では、産業の枠を超え日本の都市インフラ構想化力、技術、運営経営ノウハウを「プログラム」マネジメントにより結集し、最先端の低炭素循環型社会インフラを、競争力を兼ね備えて創る試みであり複数の案件が構想段階にある。

【講演者略歴】総合エンジニアリング産業の特性を生かし海外市場を主にした新規ビジネス開拓に長年従事し、これまでに情報通信、IT、バイオマス、新エネルギーなどに関与し、現在海外の都市化に焦点を絞る新規ビジネス領域拡大の戦略構築と案件リーディングに当たっている。

EG-1 地球熱利用による低炭素地域活性化促進

13:10 脱石油自然エネルギーへ転換の地域プロジェクト

川崎地質株式会社
技術本部 顧問 田村 八洲夫

【セッション概要】

秋田県ではハウス栽培に石油系燃料使用では採算割れ農家が増えている。そこで、各地に豊富な温泉水、地下水、地中熱等(「地球熱」と総称)を永続的な自然熱エネルギーとして、先ず農業利用、さらに融雪、空調熱源に普及を目指し、脱石油地域振興を目的に活動している。そのため2010年2月に県内産学官連携組織を会員45名で結成し、同時に新発想で低費用な地球熱の採熱・放熱法の研究開発、見せるモデル事業の実証試験を進めている。地球熱利用の理解が県内各地で浸透している。

【講演者略歴】京都大学・大学院で地球物理学専攻修了後、1973年4月に石油資源開発(株)入社、物理探鉱業務配属。1998年6月、同社取締役就任。九州地熱(株)代表取締役社長、日本大陸棚調査(株)専務取締役等を歴任後、2009年7月退職。同8月川崎地質(株)顧問就任、現在に至る(67歳)。

EG-2 ユーカリが丘の街づくり事業

14:15 子供たちの未来を創造するために取り組むべき課題

山万株式会社 街づくり推進室
執行役員 統轄部長 田中 一雄

【セッション概要】

ユーカリが丘の街づくりのビジョンは少子高齢化、環境共生化、地方分権化、高度情報化、国際化という5つの街づくりのトレンドがある。限られた財源を活かし「安心・安全で環境と健康に配慮された街」をどうつくるか、そして、「自分の街に誇りと愛着を持って、健康に住み続けられる街づくり」をいつまでも実現させていくことができることである。そのためには、いかにデベロッパー(山万)が住民と行政と三位一体型の街づくりをして、街の成長管理をしていく必要がある。

【講演者略歴】1973年 青山学院大学卒。ユーカリが丘の土地、戸建て、マンションの販売、用地買収、開発計画を担当。現在は、ユーカリが丘の開発や住民の方々と共に街づくりの一員となり業務を遂行している。

EG-3 PJの成功度に見る、日・欧米コントラクター比較

15:35 建設PJの成功要因とモチベーション比較

CCC(プラント建設会社、アテネ)社顧問
石倉 政幸

【セッション概要】

筆者が顧問を務める建設会社の建設プロジェクトの実績から日本と欧米の国際的なEPCコントラクターのE&Pパフォーマンスがプロジェクト成功度といかに関連するかの比較の結果から見えてくる、EPCプロジェクト遂行におけるスタッフのモチベーションの重要性が明らかとなった。

【講演者略歴】1962年福井大学工学部機械工学科卒。同年 千代田化工建設(株)入社、1993年同社取締役、1997年同社海外プロジェクト本部長。2000年技術士(経営工学部門)取得、2001年同社退職。PMCC事務局長2006年同上退職。ギリシャCCC社(プラント建設系大手業者)顧問。

EG-4 グローバル化の次に来るもの

16:40 日本人最少化大型プロジェクト実行から見えてきた事

東洋エンジニアリング株式会社
海外第一プロジェクト本部長代行 細井 栄治

【セッション概要】

海外プラント建設の歴史はエンジニアリング会社が生き残りを懸けてグローバル化を推進した歴史でもある。2010年、経済成長著しいインドで大型石油化学プロジェクトを最少人数の日本人で完工した。大きなチャレンジであったプロジェクト遂行を振り返り、日本企業の『グローバルイノベーション』の問題点と困難点を考察し、『グローバル』の次に要求されるものは何かを模索する。また、世界のエンジニアリング会社が軒を連ねるインドの現状を紹介し、今後のビジネス展望を考える。

【講演者略歴】1982年東洋エンジニアリング(株)入社。国内製油所、サウジアラビア肥料、タイ製油所、韓国石化、インドネシア石化、インドネシア火力発電のプロジェク経験後、2001年よりPMとしてインド製油所、ペネズエラ製油所、インド石化等に従事。2011年より海外第一プロジェクト本部長代行。